

Wallon理論に基づく自閉症様行動の考察と 有効な支援方法の検討

田 中 友 梨

はじめに

自閉症は心の理論 (Theory of Mind) や共同注意 (Joint Attention) の障害である (Baron-Cohen et al., 1985, Baron-Cohen, 1989) といわれて久しいが、一方で自閉症の情動の問題に焦点を当てた研究も数多く行われている (石井・白石 1993; Trevarthen et al., 1998; 小林, 2000, 2004)。自閉症には、反復的・固執的行動やパニック時の自傷や他害行為などが情動の激しい興奮を伴って見られる場合があり、それらはしばしば通常の日常生活や学校生活を困難にする (石井・白石, 1993; 中塚, 2005; 服巻・野口, 2005; 赤木・北口, 2008)。それゆえ、自閉症に随伴してみられる情動の問題について、とりわけ激しい情動興奮を伴ったいわゆる「問題行動」により、生活に支障を来たす状態に陥っている場合の関わりする方法を検討することには、重要な意味があると考ええる。

本研究では、人間の発達を個体内のみで起こる現象ではなく、相手に向かう姿勢や情動の共有によって他者との間に築かれる関係性の中で起こるものであると主張したWallon, H.の発達理論 (Wallon, 1949 久保田訳 1965) を手がかりとしながら、まず人間の発達過程における情動の役割について考える。次に、他者とのコミュニケーションの困難や反復的・固執的な行動、またこれらに随伴してパニックや自傷行為が見られる子ども (以下自閉症様行動を示す子どもとする) についてのWallonの考察と筆者の行

った支援の事例を紹介し、最後に自閉症様行動に対するアプローチを情動の興奮の沈静化と情動状態の共有の側面から模索することを試みる。

I 情動発達の捉え方

人間の発達については、Piaget, J.の理論がよく知られている。Piagetは、外界を認識する認知的枠組みである「スキーマ」が、既存のスキーマによって外界を捉えようとする「同化」と、既存のスキーマを新しい経験に適応させるように変形させる「調節」による均衡化を通して高次化していくと考えた (浜田, 1994)。つまり、Piagetは人間の発達を認知的側面から捉え、身体に基づく行為による外界認知から表象に基づいたシンボリックな知識の体制化、さらにより論理的・抽象的思考へと再構造化を繰り返すことを主張した。そして、このような知の構造が全体的な変化として生じ、文化などの環境変数に左右されない普遍的なものであるとして、個の発達を捉えた。

これに対して、人間の発達初期から見られる情動に焦点を当てたのが、Wallon (Wallon, 1949 久保田訳 1965) である。Wallonは19世紀から20世紀の激動の時代を生きた発達心理学者で、理に適う認知活動が主たる研究対象であるPiagetに対し、合理以前の現実にこだわり、環境をも含めた人間の現象としての情動をどう読み解くかに力を注いだ。

Wallon (Wallon, 1949 久保田訳 1965) によ

ると、情動とは外部感覚や弁別感覚を消しつつ、表象の働きを損ないつつ成立するものである。内臓や筋肉の動揺によって情動の波が激しくなると、生体は交渉活動に反するような諸反応をせざるを得なくなる。このような原始感覚的な印象に溺れると、物の表象は消え、時には切られても感じないほど感覚も麻痺するという。その具体的な例として、Wallonは、「怒った人は自分の激昂しかわからなくなり、その動機や前後のこともわからなくなる。そして、怒りに完全に身を任せれば、知覚と知能を全く失うほどである」(Wallon, 1949 久保田訳 1965)と述べている。

浜田(1994)は、Wallon理論の特徴について次のように述べている。まず、第一の特徴は、人間の行動を単に外界への個人的な適応行動と捉えるだけではなかった点である。Wallonは、他者との間に築かれる共感や共同世界という視点を重視し、人間の行動を他者との相互性において生起するものとして位置づけ、その上に対他関係、自我形成の世界の展開を展望した。第二に、意識は姿勢・情動に根ざした「自他交感」において発生し、外界と共同的・関係的なものであるという着想を導いた点である。これは、初期の発達が個体的・個別的なところから始まり、やがて社会化していくというPiagetの発想と対立するといえる。第三の特徴として、言葉もまた、単に個体的能力としてではなく、関係のなかで出現するものと捉えられている点である。Wallonは、言葉は個体的な言語能力の所産ではなく、遡源すれば他者への身体の構えや情動共有の基盤のうえに交わされる声の交感であり、ひとつのものを共に出会って味わう経験の共有という共同性の所産であると考えた。そして最後に、この共同的な言葉や身振りが、人間の世界の表象的な世界の核となり、この投影的活動の橋渡しによって、自我と客観性の世界が登場してくると述べている(浜田 1994)。

II Wallonの理論

Wallon理論(Wallon, 1949 久保田訳 1965)によると、生後2～3ヵ月の「衝動的運動性の段階」では、自ら外界へ働きかける力はほとんどなく、刺激に対する決まったパターンへの反応、または漠然と筋緊張のエネルギー発散が衝動的に生起するのみである。同時に、生来的にある母親に対する身体の構えや情動共有の基盤の上に、他者との情緒の共生を作りあげていく。生後数ヶ月の乳児の情動は大変激しく未分化なものであるが、発達の過程の中で他者を基点として情動が分化していくことになる。この「衝動的段階」になると、他者への身体の構えや筋緊張によって情動をより明確に表現できるようになり、他者との情緒的な繋がりを強めていく。

さらに次の「感覚運動的段階」に移ると、個体の運動が周囲世界に変化をもたらし、それを個体が感覚によって捉え、反復しようとする働きが生まれる。この働きは原理的には個体のうちで閉じ、他者の介入を必要としないものである。そして、これまで辿ってきた段階から大きな飛躍を果たし、時間的・空間的な世界の中に今面前に与えられた世界を位置づけるようになるのが、「投影的段階」である。この段階になると、乳児は今現前にあるものだけでなく、それを表象として捉えられるようになり、やがては現前にないものについてもイメージできるようになる。こうした過程を経て、人間の言語や知能の発達が促されると考えられている。

Wallonは、このような一連の変化は常に外界との関係性の中で起きるため、各々の発達段階の時期は明確ではなく、常に下位の発達段階と連続する(Wallon, 1949 久保田訳 1965)と述べている。また、1年未満の子どもの行動は、外界との交渉や緊要な活動ができず自分の要求の充足に必ず他人を必要とする一方、極めて早くからの情動表現の成熟が子どもの全ての衝動

に伴っているという特徴が見られる。情動は自
ずと乳児の唯一の表現手段となり、個人間に感
情交流を作り出し、後に発達する社会性の基盤
となるのである。

このように、情動にはその意図にかかわらず
他者に伝わって他者の情動を巻き込みながら、
その必要とするところを満たしていくという性
質がある。乳児の情動は他者の関わりを通して
分化し、自らの主観性に基づく情動の表出や他
者の関与に対する受動的な対応から、次第に他
者との情動の共有が可能となり、他者への能動
的な働きかけが見られるようになってくる。こ
のような発達過程を通して、自己に閉じた世界
から外界に開かれた世界へ繋がり、主観的な世
界から具体的な事物や人との関係を通して表象
の理解へと発展し、自我が形成されていくと考
えられている。

情動のもう一つの性質として、快・不快や恐
怖といった発達のより初期に現れる情動ほど、
外界を遮断するほどの強い興奮を伴うという点
が挙げられている (Wallon, 1949 久保田訳
1965)。実際に呼吸や循環器の変化・消化器や
内臓の痙攣・筋肉の収縮や弛緩など原始的な感
覚に直接反映される情動の興奮が強まれば強ま
るほど、外部感覚や弁別感覚が損なわれ、物事
を表象として捉えられない状態が生じると考え
られる。そのため、感覚や知能の働きといった
対抗する能力を身につけることによって、これ
らの情動に圧倒されないようにできるという
(Wallon, 1949 久保田訳 1965)。このような能
力は発達の過程の中で自然に培われるものであ
ると考えられる。

自閉症では、胎生期の情動に関わる脳の基盤
に不全が見られることが報告されている
(Trevarthen et al., 1998; 十一, 2007)。そして、
生得的な情動のコントロールの困難や情動共有
の脆弱性が、生後の「情動的段階」の発達に影
響し、それが社会性の発達や認知面の偏りに繋

がると考えられる (石井・白石, 1993; 山上,
1999)。そして、上記の理由から、自閉症者は
非自閉症者に比べて情動が未分化で不安定な状
態である可能性が推測される。また、そのため
に、一度情動の波に巻き込まれると、表象機能
を働かせてその興奮を沈めることが非自閉症者
に比して困難ではないかと考えられる。

Ⅲ 精神遅滞児に関するWallonの研究

Wallonが示した精神遅滞児の症例の中には、
強迫症状を示す子ども、エコラリアの見られる
子ども、他人との接触を拒む子ども、感覚に敏
感な子ども、自傷や他傷をする子ども、突然パ
ニックを起こす子どもなど、様々な臨床像が詳
述されている (Wallon, 1925 波多野訳 1983;
Wallon, 1949 久保田訳 1965; 山口・浜田,
1980a, b)。これらの症例には自閉症の行動特
徴との共通点が見出されるとともに、情動のコ
ントロールや他者との情動共有の困難性も認め
られる。そこで、Wallonの示した症例のいく
つかを取り上げ、情動が自閉症様行動に及ぼす
作用について検討を試みることにしたい。

H.ジェルメンヌ (女児) の症例 (Wallon,
1925 波多野1983; 山口・浜田, 1980a) には、
日常生活において強迫的に儀式行為を行うこと
がしばしば見られた。その1例として、食事を
とりたいが自ら食堂に向かうことができず、
「私は食べたい」、「ジェルメンヌ、食べに行き
なさい」といった言葉を興奮しながら何度も繰
り返さなければ行動に移すことができなかつた
と記されている (Wallon, 1925 波多野1983; 山
口・浜田, 1980a)。これについて、絶えず内的
な興奮につき動かされているので、自動作用は
十分でき、精神感覚・運動系も十分に発達して
いるにもかかわらず、自分の行動を1つの目的
に向けることができなかつたり、心理的に一貫
して、人としての自律をもつということができ

ない (Wallon, 1925波多野訳1983; 山口・浜田, 1980a, p.118)」と指摘されている。つまり、彼女は思考の分離したモーメントを一貫した確信や意志のもとにまとめることができず、自己と他己との二重性を分離して用いることができないため、自分の考えの働きから生ずるすべての態度を通して自分自身の自律性や人格的同一性の感情を感じとることができないのだと考えられている。

このようにWallonは、強迫的に行う儀式行為について、自己と他己との二重性から脱却して自主性や自己感覚を取り戻すための行動であるとの見方を示している。また、興奮状態では最も主観的な精神状態に支配されてしまうことを指摘し、強迫症状の強度との関連性を示唆している (Wallon, 1925 波多野訳1983; 山口・浜田, 1980a)。

J. P. H. (男児) の症例 (Wallon, 1925 波多野訳1983; 山口・浜田, 1980b) では、身体を扉の角、ベッドの鉄棒、あるいはテーブルの大理石の角に強くぶつけようとし、顔の形を変えてしまうぐらい傷や青あざを作ったりしていたことが報告されている。このような自傷行為について、Wallonは、原始感覚に代わる弁別的感觉によってものごとを表象的に捉えようと試みるが、逆に原始感覚に圧倒されてしまい、再び弁別的感觉を取り戻そうとして行う行動であると述べている (Wallon, 1949 久保田訳 1965)。

自傷行為はこのように、原始感覚を刺激すると同時にそれに圧倒されてしまう性質を持つ。そして、その行為が激情的な動揺であろうと気晴らしであろうと、常に情動の興奮と密接に関連しあっているといえる。Wallonは、自傷行為の最中に感覚と反応の二種の体系の対立が起き、それが外界と交渉する体系と内臓的な動揺との対立に結びついて身体に発作的に刺激を与えるのだと述べている (Wallon, 1949 久保田 1965)。また、このような身体内部における葛

藤は、同一性保持への強迫的欲求にも共通するものであると考えられている。

このように、Wallonの示した症例には、問題とされている症状に強い情動興奮が伴っており、その情動を自らコントロールすることが困難な状態を呈していた。これらの症例において見られた行動特徴は、現在のICD-10 (国際疾病分類 第10版; World Health Organization 1992) やDSM-IV-TR (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders; American Psychiatric Association 2000) の診断基準項目に該当する。これらの症例が自閉症を伴っていたかどうかについては明らかではないが、少なくともこれらの行動特徴を自閉症様行動として捉えることは可能だろう。以上のことから、自閉症児が示す行動の中に、その行動に伴って情動興奮が生起するものがあることが示されたといえる。

IV 事例

I では、人間の発達が他者との間に築かれる関係性の中で促されるというWallon理論の特徴について概観し、II では他者との情動共有の基盤が確立していない乳児の情動が大変未分化で興奮しやすく、そのような状態においては、情動が認知的側面を圧倒する可能性に言及した。そしてIII では、Wallonの精神遅滞児の各症例を検討し、同一性保持への強迫的な欲求や自傷行為の症状の出現に伴って情動の興奮が認められることを示し、自閉症様行動と情動のコントロールの問題との関連性を指摘した。

自閉症に見られる問題の根幹を、生物学的要因によって引き起こされる情動共有の基盤の弱さとするならば、養育者を基点とした生後の社会性の発達が困難なることも容易に想像できる。また、情動共有の基盤が弱いために、他者との愛着形成ができにくく、通常自然に行われ

るはずの養育者とのコミュニケーションや、それによって得られる心地よさや安心感の経験が乏しくなることも、推察されるだろう（山上，1999；小林，2000，2004）。さらに、情動の分化の上に形成される表象機能を用いて、情動をコントロールすることが難しくなるかもしれない。そこから激しい情動の興奮を伴ったいわゆる「問題行動」が生じるケースもあると思われる。したがって、自閉症児・者との関わりにおいては、認知的なアプローチが困難な場合や情動の興奮が激しい場合、まずその興奮を鎮め、「力動感」（後述）や情動状態を分かち合うような関わりを模索することが必要だと、筆者は考える。そこで次に、反復行動や固執行動に伴って情動の強い興奮が見られた自閉症者の事例と、筆者の行ったアプローチについて検討したい。

M君は、知的障害を併せ持つ自閉症の青年である。彼には、動作に伴う確認行動があり、特に食事場面において顕著であった。以前は一人で食事をする事ができていたが、ある時期から徐々に確認行動が増えたようだ。確認行動は、M君が言った言葉を誰かが繰り返し同じように言わなければその行動に移れないというものであった。お箸を持ち上げるのにも「持つ」「上げる」など数回言わなければならない。そして、お箸を皿の中に入れるのにも「入れる」「下ろす」などの言葉を繰り返し要求し、そこから口に運ぶまでに更に何度も確認行動を行っていた。また、食べ物を口に入れた直後に体を前後に揺らしたり指を立て続けに弾いて自己刺激行動をしながら、「んー」と声を出し続けるようになった。そのため、なかなか食べ物を飲み込まない状態になり、その結果さらに食べる速度が落ち、1回の食事に2時間以上かかることも珍しくなかった。

筆者はこのようなM君の食事場面に関わる中で、M君は人への確認行動が頻繁な時ほど次の動作に移れず、自己刺激行動や興奮した声を出

し続けることがわかってきた。そのような時には、いくら言葉で食べ物を飲み込むように促しても、ますます興奮を強めるだけであった。そこで筆者は、M君の腕の下に手を入れて、少しずつ体の揺れを止めることを試みた。強く止めるのではなく、体を揺らそうと思えば可能なくらいの力を入れた。ここで強く制止しようとすると、ますます興奮して自己刺激行動が強くなることが予想されたからである。最初、M君は自分の腕を微かにずらせて避けようとする気配を見せた。しかし、そこで無理強いせず、再び手で動きを止めて、M君が安定しやすい状態を作っていた。するとだんだん揺れが落ち着き、声も小さくなってきた。筆者は、M君の腕を微かな振動が伝わるくらい力でトントンとたたいた。さらに落ち着いたタイミングを見計らって、「飲み込んで」と声をかけると、その言葉にすんなり応じて飲み込むことができた。そして、「食べる？」と誘うと素直に箸を持ち、徐々に食べる速度が速くなった。そのため、筆者はM君の腕を離れたが、M君の食べるペースが崩れることはなかった。

家庭では、このような状態に陥ると、母親が食べさせることもあると聞いていた。もしM君のスピードに合わせるだけで何も介入せずにいたら、おそらくこの日も、M君は自分の力で一口も食べ進めることができなかつたであろうと考えられる。

18歳のT君の例を見てみよう。彼は多動の傾向があり、たえず部屋中を動き回って落ち着きがなかった。筆者は音楽活動を通してT君と関わっていたが、活動のスケジュールがわかっていても落ち着くことができず、その場から離れてしまう。また、棚の中の本を引っ張り出し、それを活動中離せないことも多かった。家庭でも本をお守りのようにいつも持っているとき、気持ちを安定させるためのT君りの手段のように感じた。しかし、T君のなすがままに任せ

ていては音楽活動が遂行できず、本を手放せなかった日や落ち着けなかった日は心残りのようで、活動が終わってもなかなか帰ろうとしないこともあった。筆者はT君の行動に対して最初は制止することが多かったが、落ち着きがなくなりいすから立ち上がりかけたタイミングを逃さず、「大丈夫だよ。座って」と、T君の気持ちに共感的な言葉をかけた後にとるべき行動を指示してみた。筆者のみならず、活動に加わっていた他の学生も筆者と同じような言葉賭けを行った。すると、筆者らの言葉賭けに対して徐々に「大丈夫」と繰り返して言うことが増え、いすから立ち上がりかけていても自ら行動を調節して座ることができるようになった。また、隣に座る筆者にもたれかかるなど、愛着を見せるようになり、このころから活動中の多動傾向が徐々に減って、本を手に持っていないでも落ち着いて活動に参加できるようになった。そして、そのような変化に伴って楽器に興味を示すようになり、筆者の弾くピアノに合わせて自らピアノに触れて音を出すなど、活動に対する積極性が見られ始めたのである。本への固執行動や多動の著しい消失、さらに活動への取り組み方に大きな変化が見られたことから、筆者らの言葉賭けはT君に共感的に響いたと共に、安心感を与えることができたのではないかと考えられる。

このような言葉かけは、同じ言葉を何度も繰り返しながら興奮を強めていた自閉症者に対しても有効であった。K君はいつも手を硬く握り締め、たえず何か言葉を口走り、ときどき大きな声を出すなど、不安定な状態であった。特に書店に行くことが好きで、書店の名前を繰り返し言うことが多かった。そのような時に、「今度はいつ行くの？」や「後で一緒に行こうね」などの言葉かけをすると、K君を余計に興奮させてしまった。また、このような場面で「コートを脱いでください」と指示しても、「コート

を脱いでください」と筆者の言葉を繰り返しながらますます興奮を強めた。そこで、気持ちを落ち着かせるために「大丈夫だよ」と言葉を賭けるようにした。初めのうちはほとんど効果がなかったが、会を重ねるごとに「大丈夫」の言葉を聞くと自分で興奮を制御するようになり、同じ言葉を繰り返して言い続けることが少なくなり、その声も小さくなった。そして、「コートを脱いでください」の筆者の言葉にも応じられるようになった。また、そのころから、筆者が硬く握り締めているK君の手を触れて開かせようとしても抵抗しなくなり、K君から筆者の手を強く握ってくることも多くなったのである。

V 考察

自閉症児は、その知的能力にかかわらず、他者とコミュニケーションすることが難しい。中塚(2005)は、子どもと母親の間の動作や態度、姿勢、身振り等による相互理解のシステムが情動的な基盤によって形成されず、後の感覚・運動や言語・認知機能の発達に影響を与えると示唆している。これをふまえて、本研究ではWallonの精神遅滞児に関する研究における自閉症様行動を検討することによって、情動の興奮が時として認知面を圧倒してしまう可能性について言及した。このことは、Wallon理論の「衝動的運動性の段階」から「情動的段階」に見られる乳児の情動状態と共通しており、自閉症では他者との共同世界に開かれる過程を経ることに困難があるために、後の「感覚運動的段階」やその後の認知的側面にその特徴が現れると解釈することができる。Wallon理論と自閉症の行動との関連については中塚・原田(1990)によっても指摘されている。自閉症児は姿勢・緊張系のメカニズムに障害、または何らかの抑制による異常があり、自己に閉じた感覚によって外界を捉えることになるため、その後の認知

発達や対人関係のあり方が非自閉症児と異なるのだと言われている。

もちろん、自閉症に対する認知的なアプローチにも重要な意義があり、視覚的にわかりやすく整理されて見通しが持ちやすい環境を整備することの有効性は、すでに広く知られている (Schopler/佐々木 1985)。一方、彼らの日常生活には、普段は認知的に理解しており指示に従うことができていることであっても情動の興奮によってその行動を遂行できなくなるという問題がしばしば見られる (石井・白石, 1993)。そのような場合には、情動の安定を図った上でのアプローチが大切であろう。つまり、まず情動の興奮を鎮めるような対応をし、現在の状況を認知あるいは感受できる状態になった上で認知的なアプローチを行うことが有効であると、筆者は考える。

情動の興奮を鎮めるためには、情動状態の共有が不可欠である。この「情動状態の共有」は、Stern (1985) の「力動感」(vitality affect) の概念に相当する。乳児がある出来事を体験する際には、その出来事をまず活性水準 (エネルギー水準)、活動性の輪郭 (パターン)、リズム等のグローバルな様相などによって捉えるという。力動感とは、そのような身体に根ざす広義の情動をいう。それは人と人が何かを感じ分かち合いながら、何かを通じ合うことのできる際の基底的なチャンネルであると考えられている (鯨岡, 1997)。このようなチャンネルを持っておらず、あるいは十分に機能させることの困難な自閉症児と情動状態を分かち合うためには、情動が最も表われやすい身体の反応に注目した療法や遊びなどが有効であることが明らかになっている (小林, 2000; 今野, 1990; 高橋・伊藤, 2006)。また、これらの関わりによっていわゆる「問題行動」が減少し、他者に対する積極的な自己表現が見られるようになったケースが報告されている (串崎・田中, 2009)。この「問

題行動」の中には、痲癲やパニック、多動や固執行動などがあったが、前述した関わりによって痲癲やパニックの消失が複数例に共通して見られ、同時に要求行動の出現のみならず他者に伝わる形での感情表出も見られた。

情動の興奮が強まれば強まるほど、外部感覚や弁別感覚が損なわれ、物事を表象として捉えられなくなるという情動の性質 (Wallon, 1949 久保田訳 1965) は、情動共有の基盤や情動のコントロールに生得的な障害があると考えられる自閉症には特に顕著であろう。筆者はそう考えている。そのため、一度情動の波に巻き込まれると、自らの力でそれを沈めることが困難になり、興奮をますます強めることになる。上述した3つの事例では、身体の保持や共感的な言葉賭けを行い情動の制御の役割を他者 (筆者) が担った結果、自ら情動の興奮を制御して本来すべき行動を遂行することが可能になった。このような他者からの介入によって自身の行動を制御する経験を重ねることで、次第に他者を基点とした社会性の発達が促進され、同じような場面であれば情動を自らコントロールできるようになると思われる。その際、場面や介入方法を少しずつ工夫しながら、自閉症児が他者に対して適切な形で自己表現ができるように支援することが重要だろう。

人は生涯を通して変化・成長を続ける。それは個人内のみで起こる現象ではなく、外界との相互作用による点を、筆者は強調したい。特に近年では、自閉症児の対人関係やコミュニケーション力に注目が集まっており、他者との関係性に焦点を当てたWallonの今日的意義は大きい。本論文では、自閉症者の示す行動の背景に情動のコントロールや他者との情動共有の困難性が推測されることを指摘し、情動の興奮の沈静化や情動状態の共有を図ることによって、自閉症者が自らそれを制御し、他者と相互的な関係を構築する可能性を示唆した。

注

本論文は、大阪教育大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。

引用文献

赤木和重・北口美弥子 (2008). 激しい器物破壊行動を示した自閉症者に対する支援：対人関係の発達および衝動性の緩和に注目して 人間発達研究所紀要, 20, 92-102.

American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 4th, text revision.*

Baron-Cohen, S. (1989). Joint-attention deficits in autism: towards a cognitive analysis. *Development and Psychopathology*, 1, 185-189.

Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., and Frith, U. (1985). Does the autistic child have a 'theory of mind'? *Cognition*, 21, 37-46.

服巻繁・野口幸弘 (2005). 自閉症青年の衝動的行動の改善における先行刺激操作と結果操作による介入の検討 特殊教育学研究, 43(2), 131-138.

石井哲夫・白石雅一 (1993). 自閉症とこだわり行動東京書籍

串崎真志・田中友梨 (2009). 自閉症支援における情動共有の意義 関西大学人権問題研究室紀要, 58, 1-9.

鯨岡峻 (1997). 現初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房

小林隆児 (2000). 自閉症の関係障害臨床 ミネルヴァ書房

小林隆児 (2004). 自閉症と言葉の成り立ち ミネルヴァ書房

今野義孝 (1990). 障害児の発達を促す動作法 学苑社

浜田寿美男 (1994). ピアジェとワロン：個的

発想と類的発想 ミネルヴァ書房

中塚善次郎 (2005). 自閉症の本質を問う：自閉症児への最適な個別支援を求めて 風間書房

中塚善次郎・原田和幸 (1990). ワロン理論による自閉症児・障害児理解 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要, 4, 57-64.

Schopler, E., 佐々木正巳訳 (1985). 自閉症の治療教育プログラム ぶどう社

Stern, D.N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant : A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology.* Basic Books.

高橋範子・伊藤良子 (2006). 学齢期自閉症児における対人的遊びの発達過程に関する研究 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 2, 125-134.

十一元三 (2007). 広汎性発達障害と扁桃体 臨床精神医学, 36(7), 861-867.

Trevarthen, C., Aitken, K., Papoudi, D., & Robarts, J. (1998). *Children with Autism: Diagnosis and Interventions to Meet Their Needs, 2nd edition,* Jessica Kingsley.

Wallon, H. (1925). *L'enfant turbulent, preface.* Alcan-PUF, Paris. (波多野完治監訳 (1983) 『ワロン選集』大月書店)

Wallon, H. (1949). *Les origines du caractere chez l'enfant: Les preludes du sentiment de personnalite.* Presse Universitaire de France. (久保田正人訳 (1965) 『児童における性格の起源：人格意識が成立するまで』明治図書出版)

World Health Organization (1992) *The ICD-10 classification of mental and behavioural disorders: Clinical descriptions and diagnostic guidelines.*

山上雅子 (1999). 自閉症児の初期発達—発達臨床的理解と援助 ミネルヴァ書房

山口俊郎・浜田寿美男 (1980a). H. ワロン論
文集より. 発達 vol.1 no.2, 112-119.

山口俊郎・浜田寿美男 (1980b). H. ワロン論
文集より. 発達 vol.1 no.3, 112-119.